

欧米印象記

小池 勇 二 郎

まえがき

昨一九五八年、欧州で開かれた二つの国際会議と、米国で開かれた学会とに出席し、一〇四日で世界めぐりをして来た。工明会委員から原稿を書くよう求められていた処、遂に締切りに間に合わず、止むを得ず一九五四年—一九五五年の間文部省在外研究員として外遊していた当時の旧印象記をもち出して責をふさぐことにする。貴重な紙面をけがして申し訳ないが、三年の間においても、それ程違つた印象に変わることもないので御了承をお願いし度い。

十人十色と云つて、髪や眼玉の色が変れば氣質も違ふのが、道理であるが、世界を一廻りして見て、何れも人の子、そう大して變つた処のないと云うのもこれ又当然のことであらう。

然し国に強弱貧富の差があり、人情風俗の相違がある以上、それを作り成した民族魂と云うか民族感情と云うか、広く云つて思想にそれぞれの距りのあることがいやでも眼に映つて来る。

アメリカ

先づアメリカ人は、よく云われている様に開放的で磊落、實際的

で行動的で、悪く云えばアンチヤン的なところが多分にあるが、彼等のもつている烈々たるバイオニーフ精神だけはもつて範とするに足る。人跡未踏の荒野を開拓して僅か三百年にして今日の強大な工業国を作上げた彼等の飽くことなき行動力、よりよいものを追求して止まない開拓精神、文字通りフォアー・ベター・リビングのためなら一歩でも前進し、決して現状に妥協しない積極性、これが自由資本主義と結びついて今日の、われわれから見れば正に天文学的なスケールの大工業を作上げたものと見て良からう。

その代り彼等は実に忙しい、欧州が壮年期から初老の年代に入り、シットリとした生活の悦びをエンジョイする段階に生きているとすれば、彼等は正に青年期にあり発展の途上にあると云わなければならない。極言すれば、生活を多少犠牲にしてもビジネス・ファースト、それが証拠にアメリカ位食物の不味い国はない、昼飯の如きは空の飯盒にものを詰めさえすれば安心だと云う風である。尤もアメリカでは食物は一つの立派な工業であつて、主な大学の工學部にフッド・インダストリー学科があり、食品の加工、保存技術の教育研究をやつて居る、營養師万点の工業製品が全米くまなく売出されているが、肝心の味の方は研究の対象としては手に負えないと見えてまことに索漠たるものである。私見をもつてすれば眞の料理と云うものは一つの芸術であつて、味とか香りとかは今日尙科學的計測の及ばない処である。これを測定し、評価するのにペロメーターしか持ち合せない現状では止むを得ない。料理では日本食が第一、次がフランス料理などと云つて居るのはフッド・インダストリーに對するはかないアナクロニズムかも知れない。

こうしたアメリカの忙しさ、生活の味気なさにブレイキをかけているがレデイス・ファーストのお国柄と見るのはひがみか、彼等の家庭生活は凡て婦人が中心で、如何にして生活をエンジョイするかに汲々としている観がある。アメリカの家庭料理はたしかに美味しい、彼等と雖も万更味のセンスが欠けている人種であるとは思えない、にもかゝらず彼等の外に於ける生活が目廻る様な忙しさと、メリー・ゴーラウンドを続けているのは、一つは又婦人中心のせいでもあると云うのはまこと皮肉千番のことである。家庭に於ける世界最高度の文化レベルにある彼等の浪費世話が、彼等自身をかり立

てゝ、止る処のない生産活動へ追込んで居る。このスピーデーな循環は乗つたら最後逃げ出せない。ゆつくり物事をやつている暇がなくなる、そこで彼等の生活エンジョイの仕方すら利那的となり、刺戟的に傾くのも、これ又止むを得ない処であろう。欧州の落付いた寡黙氣、シットリしたエンジョイに比べて非常に對照的に感ぜられるアメリカの特色である。

ニューヨークのアップ・タウン附近を歩いていると、極端に云えば横丁毎に喋つて居る國語がちがう、フランスありドイツあり、スペインシユ、イタリアン等々、世界中のあらゆる人種が入混つて作り上げている國である。彼等の開放的で誰に對しても偏見をもたない性格は、こゝから來ているのでまことに無理からぬ次才である。彼等には人種的な血の団結はない、従つて民族的な愛國心が生れる筈はない、ここに為政者の悩みがある訳で、このことに愛國心を鼓吹せんと苦心している様が見られる。映画館でも、野球場でも人の集まる処では必ずと云つてよい位國歌の吹奏が行われている。人々は立上つて國旗に敬礼をするのである。丁度戦争前夜の日本の姿を見る思いがして憐れを感じた。又或時は原子爆弾投下の想定の下に大都市の退避訓練が行われ、まことに滑稽に感じた。恐らくは指導者は退避の一〇〇パーセント無駄なことを承知の上で大衆を踊らせているのであらう。アメリカは或る特定の民族を敵呼ばわりすることの出来ない事情があるにしても、こうした政策を通じて、この富める國、この生活レベルの高き國を守り抜こうとする愛國心が培われつゝあることは見逃せない。然し文化水準の高い國ほど破壊に對して脆く、多くの弱点をもつて居る、近代兵器の恐るべき破壊力に曝されたとき、果して彼等の富と繁榮とで結ばれているかに見える団結力がもちこたえられるかどうか、これは甚だ疑問であるとの感

を深くした。

イギリス

アメリカから英国へ渡つて、先づオ一に感じたことは、勤儉貯蓄、上杉鷹山の国もかくやとばかり驚いたことである。この戦争で植民地の大部分を失つた彼等が、生活を切下げ冗費を節して、工業の復興に努力し続けたことは誠に見上げたものである。生活必需品の統制がすべて解除された今日に於ても尚彼等は勤儉の精神を忘れない、曾ては世界の富を支配した傲慢不遜のフングロサクソンにとつて今日の耐乏生活は忍び難い処であるかも知れないが、また、これをよく耐え忍んで、前途に希望を求めて止まない不撓不屈の精神こそ彼等の真骨頂であると云えよう。まことにイギリス人は傲慢で人になちまず、誰からも好かれぬ人種である。スイス旅行中、汽車の同室で一英國紳士と語合つたのであるが、彼曰く、イギリス人は傲慢尊大で他民族に好かれぬ、このことはイギリス人自身がよく知つてゐる。イギリス人同志の間でも全じことで、決して未知の人とは口もきかない、たま／＼電車で向合せに座れば、夕刊をもち上げてお互の顔もみない様にしてゐる習性がある、これは誠に困つたことであるが、これは昔の貴族政治時代からの習慣が続いてゐるのであつて、一朝一夕には改まる見込みがない、然し人間が悪いのではなく、單なる習性に過ぎない、その証拠には自分は今汝と楽しく語合つてゐるではないか、イギリス人は母国を一步出れば、この因襲から脱れることが出来るので大いに楽しく隣人と語合ひ心を通わし合ふことが出来る。深く付合つて見ればイギリス人はど誠実な、親切な人間はないと云ふことを発見するであらう。英国でも少しづつ進歩向上はしてゐる。マグドナルドが首相になり、英國人が喜んで彼を支持したことを思出せば、英國の国民感情がどの様に動きつゝあ

るか判るではないか、と。

イギリスでも町のオツサン・アンチヤンとなると、まことにきさくで面白いし、付合ひ易い、よく彼等が公園などで話しかけて来る。丁度広島原爆乙女たちがイギリスを訪問した直後であつたせいもあるが、広島原爆のあととはどうか、まことに気毒なことであるが、あれはアメリカがやつたんで、自分達のせいではない。ロシアとアメリカは戦争する気か、その時日本はどうする積りか、などとはみかけて来る。イギリス人は戦争にはもう懲々で、ロシアに対して別に敵意もないし、何とかして協調もして行き度い。何故にアメリカがあんな様に神経質にロシアと対立して戦争の危機を招いてゐるのか了解に苦しむ、まことに困つたことだと云う感情が一般の様である。今度戦争が起れば、それこそ英國は元も子も失つて仕舞うことが判つてゐるだけに、何とかして戦争を喰止め、平和を維持して行き度いと念願してゐることが見受けられる。然しことごとくに現状維持に精一杯で、消費節約によつて国力の恢復を期してゐる彼等の行き方は、一面積極性を失つて、万事消極的になり勝ちなのは止むを得ない処であらう。原子力利用の研究を除いては、科学研究の面で余り進奇なものもなく、アメリカに追随してゐる感が深いのもこの辺の事情によるのかも知れない。一例をテレビジョンについて書いて見よう。技術的に何等新奇なものがなく、古い技術を固守してゐることもさること乍ら、テレビに対する考え方がアメリカとまるで違ふのである。イギリスでは上流階級はテレビを見ない。中流或は労働者階級がテレビを良く見てゐると云われてゐる、その理由は、上流金持の連中は本物を見に行くことを楽しみにしてゐるので、あんな四角な窓を通して似せ物が見れるものかと云つた氣風

である。永い民族の歴史を通じて築き上げられて来た有形無形の文化財と云うものは、その本物を、歴史を背景とした姿で觀賞することが本筋であつて、真に文化をエンジョイせんとする彼等の態度はまことに同感の至りである。ラヂオが録音テープの再生のみに偏り、テレビがカメラ、アングルの遊戲のみに走らんとしている今日、彼等の態度はあながちノスタルヂヤとのみ片付けられない一面の眞実をついているものと共感せざるを得ないが、こんな訳で、貧乏者がテレビを見ると云つた、日本では想像も出来ない倒かさの社会現象の起つてゐることは、大いに反省させられるものがある。英國のテレビは日本と同じ様な英國放送協會の独専事業となつてゐる、ところが上述の様な次第で、受信者が比較的下層の方に比重が多い為、勢いそのプログラムもミーチャン、ハーチャン的とならざるを得ない悩みがあり、公共事業として痛し、かゆしの体であらう。

又中波の放送をも含めて、テレビは勿論のこと、英國にはおよそ商業放送と名のつくものは一つもない、これはまことに特異なことである。彼等は放送とか、テレビによる広告効果の価値を知らないものであらうかと、いろいろたずねて見ると、その理由はこうだ。

万事に慎重を期する彼等のことであるから、曾て英國放送協會で廣告に類する放送を試みにやつて見たことがある、その効果はまことに著しく、予想を絶する効果が現われたと云う。彼等はこの効果を知らないのではなく、知つてゐるからこそ商業放送を禁ずる必要があると説く。若し商業放送を開始すれば、広告主が殺到し大いに繁昌するであらう、そして商品も飛ぶ様に売れるであらうが、それ丈に余計な品物も買う失費がかさむ上に、広告宣伝費全部が商品そのものに加算されることが理の当然で、その上國民が皆なで商業放

送局を喰わして行くだけ無駄な出費をすることになる、だから、止めた方が結論として賢明なやり方であると。万事この調子なのが英國人氣質ではあるまいか。

ド イ ツ

オランダを通つて、汽車でドイツに入つたのであるが、国境の停車場で今まで乗つていた車掌とか、税関の役人が一せいに独乙人といれ替る。とたんに独乙語に変わる訳であるが、彼等の服装、態度が先づ眼につく。前の高い制帽をかぶり、キチンとした制服をつけてゐる彼等の容姿は美しくもあり、凛々しい限りである。ドイツ男にフランス女と云われているが、制服制帽に身をかためたドイツ男はたしかに凛とした美しさをもつてゐる。その後ドイツに暫く滞在するうちに、発見したことであるが、だからこそドイツ人は制服制帽が好きなのである。制服制帽に縁のない連中も、勇壮な服装をしてそのまゝ戦場へ馳せつけても困らない位のスタイルで、颯爽とオートバイをとばしている。どうも軍服に縁のありそうな氣質が彼等の心底にひそんでいる様に見受けられる。

ドイツ人は極端に合理性を好む、いな、合理的でなければ我慢が出来ないらしい。これを、お人よしと云えは確かに愛すべきお人よしであつて、アメリカ人のお人よしと違つて、重厚な性格に加うるに、正直もので底抜けのお人よしと評することが出来ようか。それ丈に一面好き嫌いがハツキリしていて、イギリス人は大嫌い、フランス人も大嫌い、日本人は大好きとスツバリときめている。アメリカ人に対しては軽べつの念をもつてゐるが、好きでも嫌いでもないと云つた処か。

ドイツの映画館で驚いた。あらゆる外国の映画を全部アフ・レコで

独乙語に直して仕舞うのである。彼等にはサブ・タイトルと云うものは我慢が出来ない。フランス人が流暢な独乙語で語りあい、アメリカの漫画ドナルド・ダックがしゃがれた独乙語でわめきたてるのは未だしも、日本の俳優が流暢な独乙語で喋るのを見ては、まことに珍妙な気分にならざるを得ない。これもドイツ人の合理性の現われであるが、それだけに彼等の性格の中の狭さを見せつけられた感である。

戦後のドイツ工業の復興はまことに隆々たるもので、かね／＼話も聞き、その積りで行つたのであるが、矢張り予想を越ゆるものであつた。彼等の合理性を貴ぶ精神が遺憾なく發揮されたのは、まさにこの工業の復旧の面に見るのであつて、一九四七年頃までの窮乏のどん底にあつた彼等が、一度アメリカのマーシャルプランによる援助を受けるや、料理屋やバチンコ屋に投資することなく、先づ荒廢した工場の再建と、学校の再建とに注込み、歯を喰ひしばつて奮闘、努力した。その甲斐あつて今日の堂々たるドイツ工業を短期間に再建することが出来たのである。これこそ、正直で、勤勉で合理性を貴ぶ独乙魂の偉大なる勝利であらう。

ドイツ人の正直なお人よしさは一日会つただけで感じとられる。街を歩いていると、珍しい奴が来たなと云う感じで、皆がジツと見ている。アメリカではどんなに毛色の変つた者が歩いていても、誰も注意してもくれないし、われ関せずである。英国に渡ると、東洋人が珍らしいのか、見て見ない振りをして、ジロツと見る、視線が合いそうになると、サツと逸らして平然としている。いかにもイギリス的であるが、ドイツとなると少々事情がちがう。ドイツ人はジツと見つめる、別に気兼ねもしないし、遠慮もしない、こちらと視

線が合つても、ジツと見ており、しばらくして最後にニコリとする。まことに素朴で親しみ深い感である。この辺が三民族の氣質の相違であらう。

イ タ リ ー

スイスを通つてイタリアに入ると先づ日本の風景がつよく印象に残る。イタリアは農業国であつて、人口多く、土地狭く、いかにも日本に似通つている。フランスが首都パリによつて代表される近代文化の中心を除くと、農業一色の国であるのと同じく、イタリアもローマとかミラノとかの古い文化都市にのみすべてが集中しており雑然、混沌とした感である。イギリス、ドイツが工業国であり、大都市が国中いたる処に分布し、整然とした清潔な感じの国を作り成しているのと比べ、著しい対照である。

イタリアに於ける汽車の混雑振り、ローマなどの都会地で、なんとなく街をぶらついているアンチャン連中の多いことなど、凡て今日の日本に甚だ似通つているが、更に驚くべきことは、大都市の真中に蠅や蚊の飛廻つてゐることである。イタリア入口の才一夜をミラノのホテルで過したが、その食堂に蠅が遊んで居るのを発見して先づ一驚、更にその夜安心して寝ているベットで、いやと云う程蚊に喰われて目を覚めた。離国以来アメリカから欧州各国を廻つてゐる中に、この世に蠅や蚊がいることを忘れて仕舞つていた。はる／＼ミラノ迄やつて来て、再びお目にかゝるうとは夢想もしなかつた丈に、イタリアを見直すとともに、望郷の念禁じ難きものがあつた次才である。

イタリアはこそ泥の多い国と云われている。幸にその厄は免かれたが、金をねだられたこと数回、ローマの街路上の喫茶店で、旦那

パーカーの万年筆は如何で、お安くしておきます。三ドルで結構、と云う手合ひにたかられたこと再度。一事が万事で、何となく道徳がくづれ、秩序が乱れていること、わが日本の如しとの感を深くした。

然し乍ら、古代ローマの壮麗な遺跡、国中いたる処に残されている古代の偉大なる芸術を見るに及んでは、彼等の天才的な才能の豊かさを認めざるを得ない。現在学問、芸術の両面で彼等の中から傑出した人材の出ていることも否定し得ない処である。一見ミーチャン・ハーチャンの見える彼等が何となく心の底に古代文化を通じて、誇りと落着きをもっていることは矢張り先進文化民族であるせいであろうか。云うなれば彼等こそあらゆる民族的試練を経て来た玉石混淆の、簡単に割切れない民族であるかに見受けられる。

インド

ローマをあとにして、カイロを経て印度のボンベイに降り立った。ボンベイの飛行場は飛行場とは名ばかりで草ぼうぼうの草っ原、その真中に滑走路が只だ一本、見渡すところ、今乗乗てたスーパー・コンスチレーションが只だ一機、その他に飛行機らしいものが一機もないと云う。これでも国際飛行場かと怪しまれるばかりの飛行場である。場外の柵のまわりに老若男女が群集し、真黒い体に切れをまといつて、裸足のまま立つていたり、座つていたりして、何もなすことなく、ボカンと見とれていた。印度での才一印象で、この余りにも西洋文化とかけ離れた悲惨な姿を眼前にして、何が故に吾々東洋民族は、この様に文化に立遅れをとつたか、又何が故に吾々は、この様な悲惨な生活に甘んじなければならないのかと、誇張ではなく真に涙のこぼれる思いがしたことである。

インドは貧富の差が甚だしく、極言すれば貴族と奴隷の国である。教育機関が欠けているが故に、未だに大多数の国民は原始的な生活に甘んじ、窮乏のどん底にうごめいている。

然し今インドにはニューズピットが芽生えつつある、日本を見習え、日本の力を頼りとして新しい国づくりをしようとの考えが培われつつある。われわれの今日の文化に立遅れた悲惨な状態は凡て英国の庄政の結果である。もう英国の絆から脱して、日本及びドイツを指導者とも友人ともたのんで前進しようとの意気込みを見るこゝとが出来る。然しこれも進歩的な一部の意見であつて、大多数の国民はわは聞せずの虚脱した生活を送っている現状である。卒直に申せば、彼等の今日あるは、たしかに英国の庄政の然らしむる処もあるに相違ないが、彼等自身の無氣力、怠惰もその一半の原因であることは否めない。

ニュー・デリーからカルカッタ迄、一〇〇哩以上の大平原を汽車で横断して、しみじみ感じたことであるが、国の力、民族の力と云うものは人口と国土の広さである。窮極するところ、この二つに帰するのではあるまいかと。アメリカの大平原、インドの大平原、ソ連、中共の雄大な国土、こゝには想像を絶する未開の力がかくされている。加うるに世界最大の人口をようしているこれ等の国々こそ、次の世界の四大国ではあるまいか。

インドの再発足による東洋民族の立上りをわれわれは心から期待する。
(工明会副会長電子工学教授)

